

開発統制による業務システムの構築

—システム基盤整備活動の第3層(1)—

企業システム開発の現場では、技術進化への追従や、日々のさまざまな業務対応に追われ、多忙な状態が続いている。しかし、開発するシステムには高品質、低コスト、短納期が求められる。本稿では、この要求に応えることを目的に、業務システムの開発に統制の枠組みとして一定の標準を与えるシステム基盤ソリューションとしての“開発統制”について考察する。

開発統制の必要性

昨今、経営とITは緊密となり、企業におけるIT活用は“効率化”一辺倒からサービスや価値創造などへ広がり、多様化が進んでいる。また、ITは急速に進化・複雑化しており、企業のシステム部門はつねに新しい技術や活用形態を理解・把握していることが求められている。加えて、技術人材が業界的に不足するなか、短工期化やコスト削減、仕様変更対応（変化への対応）などの要望も強く、開発の現場はつねに厳しい状況に置かれている。

野村総合研究所（以下、NRI）がユーザー企業を対象に実施したアンケート調査（2006年）によると、調査時点以前の1年間における開発プロジェクトの約4割が成功していないという状況が確認された。67%の企業が納期面で、46%の企業が品質面で予定の水準に達しなかったと答えている。これにはさまざまな理由があると考えられるが、ここでは、“開発統制”という観点から、その解決策について考えてみたい。

ある程度の規模をもつ業務システムの開発プロジェクトでは、人間系のマネジメントに加え、一定の標準化に基づいてシステムを構

築することが不可欠で、このための枠組みが“開発統制”である。これは個々の業務アプリケーション側ではなく、全体の共通インフラであるシステム基盤を通じて提供される。

業務システム構築を支える開発統制

開発統制は、開発基盤と開発標準という2つの仕組みとして用意される。開発基盤は、業務アプリケーションの構造を機能分類し、汎用性の高い部分をツールの形で整備したものである。そして汎用性の低い個別部分は開発標準として部品やドキュメントの形にまとめられる。これにより、開発工程に標準を浸透させ、属人性を小さくすることを狙う。

開発統制により次のような効果が得られる。

品質の確保

一定の規模以上の開発プロジェクトでは多数の要員が投入されるが、全員に十分なスキルや経験があるわけではない。そこで開発統制により熟練者のノウハウを“見える化”し、作業をそれに準拠させることで、技術者の力量のばらつきに起因する品質低下を防ぎ、安定した高品質のプログラム生産が可能となる。

コストの低減

適正コストによる開発を実現する上で、開

野村総合研究所
基盤ソリューション事業本部
基盤ソリューション事業一部
上級システムコンサルタント
藤岡賢治（ふじおかけんじ）
専門は基盤ソリューションの企画・
提案・営業



野村総合研究所
情報技術本部
オープンソースソリューションセンター
上級テクニカルエンジニア
寺田雄一（てらだ ゆういち）
専門はオープンソース全般の活用および普及・
推進



発者の生産性向上は効果的な方策のひとつである。そこで開発基盤と開発標準によって一般の開発者が手軽に熟練技術を用いられるようにすれば、開発生産性が高まり、コストの低減につながる。

サービス提供のスピード化

企業システムのなかには、業務単位でシステム基盤や開発方式が実装されたため、全体の整合性や接続性に欠けるものがある。この場合、システムによるサービス提供のスピードが事業のスピードに追従できないことがある。開発統制による標準化を行い、シンプルなアプリケーション構造と処理手順とすることで対応スピードの向上を図ることができる。

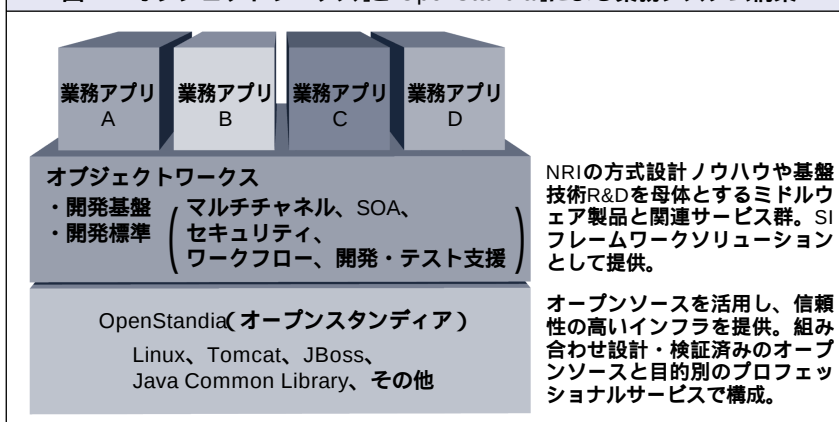
より実践的な開発統制の考え方

実際のシステム構築の場では、統制の枠組みを与えることのほかに、つぎの2つのバランスをとることが大切になる。

最新技術への対応と統制のバランス

ITは日々進化しており、企業システムの品質や競争力を保つためにも、技術進歩に対応していくことは大切である。その意味ではオープンソースの適用が有力な選択肢となる。オープンソースには、ソフトウェア開発にお

図1 「オブジェクトワークス」と「OpenStandia」による業務システム構築



ける最新の優れた技術が盛り込まれているものが多い。

NRIでは、開発統制を実現するシステム構築のフレームワークとして「オブジェクトワークス」を、またオープンソース適用のソリューションとして「OpenStandia」を提供している（図1参照）。これを組み合わせることにより、開発統制を保ちつつ最新技術の成果もとり入れたシステムの構築が図れる。

拡張性・柔軟性と統制のバランス

業務アプリケーションは開発後も機能の追加や変更が行われるのがふつうである。したがって、アプリケーションを支えるシステム基盤には拡張性や柔軟性をもたせて、機能追加やハードウェアの取り替えに際して業務アプリケーションへの影響を極小化させることが求められる。柔軟性を追求しすぎると、システム基盤がバラバラになって適切な運用が困難になる。この観点でのバランスも、システム基盤に必要な考え方である。 ■